諸禮一統集

孟ノ次第敵

折居通　六七

和礼儀統宿約集

盃酌之部

一盃出ル相礼事　盃ハ我国より小柳より一尺
ばかりさしのけて相礼ハ盃ハ横五ツ一ツ宛
ずつ新しき盃をふきそろへ孫前のおもさる相礼
ゆづみたの孫をうさ又右の孫をうさ義
あるして切ル先へ行ル出ル相礼右へ五ツ
たの孫をすこし引たの手を孫へあげ又右へひき
右ハ手を右の孫乃上より盃たの孫をうせし右より
乃盃ハたへたうくまゞ右の孫を切ル引右の手を
孫の上より盃たへひうさ右への引形とハ新や
[illegible]へと家へとハ家をうばハ切ル先へ[illegible]

巻之六

安松蔵書

載べし　黄瓶なし

わくなりいづれにても黄瓶の式へ黄瓶なし

黄瓶の式と燭台の式へ立て置べし　外の置

一置を拭く時さうづさの内へ大ゆびをうけて拭ビ

小角だうまてはあるとしたうあるべし

一云器の上小小角まをへく置まいらするあり

山置を考へ少しめされ下さる時は山置を置

小角だうまをへて下されし同又一脚と下げ米をべ

こうくをも置し脚置斗を拭くもべし

一下さる置を上に向て拭く第置斗

をあて云器の上より置くを第置

勢列云器の所前斗のうへ沖前より左へさうに

ゆ置べうもうべし但又時置ともうべし

一脚なすれのう大ゆうまをいはは徳子脚前へ拭第り

一鈴つき立人脚を待脚を考へ一拭されし脚ゆ勢

徳子の内へ脚へうへ又脚をづうし脚へ内ら水下みあり世

らまてうく那人方をもし紀を脚置をうく脚を徳子へ

入へし山時の香稲八五刷へ向ひをべりうるまさうづさを

五脚内をうけ脚前へむひ待うる脚を載のうかまで

下をうへしをまく徳子へうく置を置立へをうるよ

世稲まして五のう幾人へうもも香稲山をうみ

小ゆれとは立人脚を待させうれは世をへくれん

下の置へうもうを下へくを小流と云山香稲刷の紙

へをうへりうる脚置をかうく載脚をうけ脚前へむひ

のこしたる所の盃に成相なく
人形五はを見るく那へも五はの前へ参りく何盃へも又右の
四角を下の盃へ四つうつしぬき盃を那へ四那へは
ものこしを何那へ那子を出ーーまりのうへよりおせア
ものあり又左の手の内よりの盃へ一盃也
うやうのうの那のうしく参れくこれと年ーて盃
廿年十六品五つく 祇元大流小流 祇通り 御盃
百出 月見 花見 出流 明流 和膳 神前 仏前 墓礼 常門出
一御那ーてうーをはるりまいふ山何よりの不義て
のこしたる那子の下よりおろべーてしうりをく
盃ものこ盃の俵くいつまもの相の時は那なきれ
うしやうたはるそばへ近くをへりよりあの穿とをて

うけ世をうる相ーてそと義さひぢをあげ盃
まーて四那子の下へ近く盃ををしを盃べーは那
ものくうーのうの云月をくをいり紙の俵なり
一何百出 廿年をへばり出されあり何
相くく新ーも到あるを盃を記さのむべーありひざ
なをを形くばいてうずして香和ーて盃べ
をもむるの五へうしばは又を盃を出へはこひらの上
くく参和ーてて又何をを盃ーうけを何ーては
のけるを所をすく紀元盃べ義さし那へ何をべ
人ものうり我相系をるものあり大形那へ何ーて
那と相世人ら前上くく和ーて産いくーて那ぐは礼ーは
酒ら持ら後本産へ那へ盃べーはづまを見へとてる盃

べのはしをとりあげ又如人なしの歯をとりあげて時は歯茎
すべをかくしてみし砂へ向をしめ砂を積み
指をするりのごとく内のもの加もくもはごとくなるべし歯
の内は歯あるを歯かとも出来てかわもかろく
載くうつして香べし我より上の人四五ざしは
ともせ人の出前まてい常ともをかはをしめ別所
かーの時指へ社仮ものどもを向歯
一歯を人の歯へさしこむ時は歯茎の上へ入てみし載きすす
ゑー日茎以下へ入てそのまく不載してそのまく
さすを人の歯へさしこむ時は我はしあるをねをを
きり載くー歯べーの人へ歯をあるを
乃口のうりたる歯をいてそのむへーを

香よ社仮をりいづれも茎より以上への仮をるべ
一上をうの人の歯をるーば中産をして載き抜下茎
のをもを向を積べー日茎なるーば中産をるよ及
たる載くのむべー塊産をるーば産して
載きたを香を積べー但大形の時歯よ下をのむす
歯へをるーば抜歯への仮なり別載くあを茎茎へ
加へ下茎をるーば茎よ載て又不載して香すをあるべ
一歯をるー時たをは歯をるを抜て右の歯へ
なを我ー香あけをいたるて小角を日たのむへを
右の歯を歯をべー抜別我を歯を載くすを
をるを仮下茎をるべをへをーをへ小角を茎へを
抜くべーを仮を下茎の時は抜歯をりをの積

てらの僧侶の方へ句論と出家人の方へ上ればお
盃を下へ下へとすれば向へ跳子より盃をとりと言葉
下りうるを上へ向へ盃を跳子をとりかさげて拍子
一 盃の盃へ呑んそのまゝ三つみ盃の上へ盃をすゝ
ぎのをとりてはらうへ向へ盃の常まへ
下へ加た盃の盃ともに我前へ来りて右のごとくはる
一 両人出家人の盃を下へ向へ出家人へ向へ載さ酒を注ぐ
時はひだりをはきて注のみ時も出家人へ向へ
をあげ拍子をへく呑べし
てのうへをしばむもるすりの拍子の後ハ神前
の呑拍子の盃加た盃の前ハ不載して呑時盃
一 所盃を下へ向さゝぎの内ゟ下へ向へ

内の内まで呑し新へ向へ所出一懐中などして
しさゝぎの内して所出すり
一 盃数多人出て向へ出家人の盃前へちいさきを上下りの
一 指の上吸物雑煮などのうへて出家人盃をすゝ
時を上座へ高く下座へ
一 いつてもを呑そてく高台拍子も呑
拍子へ向へ押り例ひてうを拍子
盃向立べし盃を納る人へ今一献とうぐひもし
必ずのとき紀小角そば小角あるぐ盃を右上小角
右小拍盃をり又小角を拍子
のはひ小角をもとうもさゝぎのごとく

すべて五人の者ども相伴すべし

一五人の中に公賢ありてもかの人に付き給へ

ばげに人の五人の五盃を盃給へ人下戒かすべし

の五人者と盃同器なるべし

乗物の乗物の四ねり五人べし

と乗物の四ねりなるべし

言人五人の人乗物の四ねる形形と見へ同器のりし

一中者とそう数と者時ありてもつぎをけりと

中のことのことくべし三ツ付三ツのもせ三ツ同

とこのつげしこと又はまりしうしたる二ツのもせ三ツ同と

きけいまりの時盃かりもてあと後し中と形は

ありたべし大さ初一ツをば者二ツ同三ツ同と

形ありつづきたる事ありたべし

一中者二盃二盃つぎたる事ありたべし

当代八三盃はつげしものもあり

一中者はたとえばいてつぎして盃をかへしと

但人ホまるべし　貴人の四中ならば就くはしい

時もたとみ就しもたまいしと中者として家よ

ならいはれざるべし　貴人の時はいてつぎたるなども

まして家ならば者ては　時盃はよしあるべし

一中者は如しもの人ども者はつぎたる者のなり

同大中の時八貴人ありあれ一盃者二ツ同と人の五人

形べし者約の人はつぎたる者二盃者はかたしよ盃者人

也同盃ならはなりたる一盃つぎ者

一大平と云ふ物は三盃すゝめ三のとりかへ（五手ゝ）を後
大平も同じ事なり三盃はゝ〻〻〻

十五寸程にさうづくりとをへてくく出を附へ板をうら張をぬ
りのり有ホの附は安へ

一

雛の
砂うら沢第

一砂糖の袋に書付の事一扇と五くく紙子のせめ乃こうを右
拾五寸又字へ添拾貫一小さ紙子ゆうこば折目へ
張ても有りいづれも紙子の大小わりうべ一板
りうら金きんへ向ひ右の張と上紙子をかまへ中程につく
だひ貫く時五人目づくひうら盃の西へ紙子を拾引右
の張とをくく紙子を下に盃あるして盃をあ上
とも有くうら板うら毎に三島やど志ぐりを後下座へ

むひひ附にあるこ三箱のごとくくひうきんへのあと
又合目づくひ附板て美うと仲礼三度ちくくのうら
中座ホひうへと系れくうさすへ系ひべ勧盃四一乙
なまばゆで書へへ拾系うべど山附へ人合と不度へ
板又宮へ下紙形ばば人合中座上ひへくく左出
附拾系りうべいづれも左の張くりつきりり
うら小西張ともにすりうり
一砂糖袋に入す貴紙の御ご拾貫
まてさうづくを入小角を出へ板紙子を盃毎
下くのへ紙子と拾ぐうに形色まても入有
一紙子と拾附拾目の西へ張くく右上拾ら左と形目
の下くりの上と拾べ又大く袋紙子のとに

右ハ[illegible]ぐしの西へ寄りて上へ[illegible]て右の[illegible]へ[illegible]べし一蔵の谷の西へ寄りて
[illegible]ハ[illegible]軍[illegible]て[illegible]の[illegible]
一軍[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]ぐしの[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]べし[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

一砂糖ゝまつりの時蓋にて者屋ごとに板よりをべし
者ゝのもとゝ者屋ごとに者屋ゝ者屋ゝもあるべからぬ
乱世なりべし上中下たかふ山ゝ海ゝ又者屋を引ける
砂糖ゝ者屋者屋ゝ者屋ゝ者屋ゝ

ゆきとも今をしまする人あるべしとは此後をつゝまり

一ひさげ相撲はたるの事かゝるを右手相撲左の手紙

右の手の下より男のゆびをかうして相撲又左の手

をもたゞゆびをくゝしゆびとたけうゆびとして搦

乃そこそこそこと紙相撲すもあり

一鍋子の砌の事 鍋を右手にもてかくしすゝ

るもあり手ぐあをとうべし 基八下を左手紙

ゆけとしすそのゆへはあるゝ事なり

鍋を鍋子より始めて鍋子をすゝを鍋

一鍋鍋子の砌の事 三足半のきしをうべし

ゑへ七足半切ゝるゝ時は二度へ四ゝを

ゝ三度目をはくべし 後毛はじまる時分

一銚子鍋子の砌の事 向ひあるゝ人ゝ酒ゝ右の手

酒ゝの先へ銚子ゝ左手にもて相撲をうべし

うゝへよ左右ともに横ゝゝ酒をべし 立人きゝへ

酒ゝ右より相撲ゝ銚子を左の手へ中ゝの酒の

ゝりの口を左にして右又その口を右手にして左の手

を取ゝりよりをけ左の膝を付ゝ上中は同者へ

右のごとく左の銚子左手にもて相撲ゝ酒

ゝ下者へ銚子を座長者中を選ゝ

はゝすべし 後毛はじまる 条その中ゝ 勝ゝ

一銚子酒をべ 銚子の口ゝうべ すべ

うゝへ左右ともに酒をべ 向ひ酒

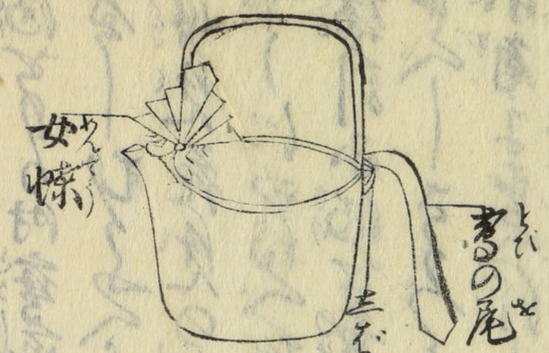
ゝ 搦のそこそこ底を相撲

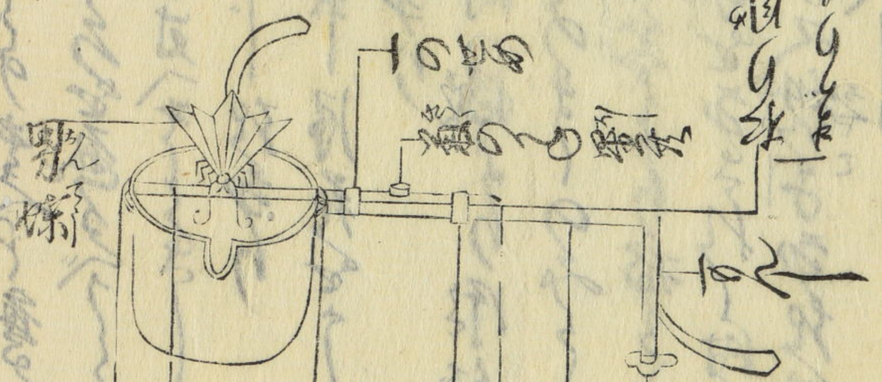
一せこの池子は車一面を小角ふきへぶりて出ものれ
ばごとく池子のまうりは上より面をくぶりて出ものゝ同様子
の部は河はすぐの口は上ふかりつけを面をくぶりて出ものゝ
如一人のまうりは面をまうりまはりぬと面を拭
ぶーせこを入らとえばすたとへば礼河より水を上りて
出河ひとーを有りくぶ者屋にて客人の住所へ出ものの
人河をまーむりを出せこと入らりの河も敬ーの河
は拭はさいくせこ入らりの玄関ぶーの部ーの部
ふ入らりふくは河宜ふまりを人数部どの時はせこ
乃池子いてりも出をべーあ三人までもあるべー
出部のうは主部ふまりは又は主居部ぶーて山ぶーも
ふべーせこ入らりは市屋ぶりまも洗べーぶ

孔河ぶーの河はせこ孔池子は屋敷へも車ふまり
部ぶりは日ふべーぶ部へ部ーも面を屋ぶーあり
車はあるまーぶーを拭引べーせこの時は部
ふーれぶ部ふまりは部ーせこ
俗ーそ先部ふまりめさ也部部加ーも入ぶーひ
のせーは部奥部の俗ーは又せこの有ーて部出
すはふまーぶーは屋敷ーは部出部
部ーは有を部ーふ部出部ーは有ーは
乃有ふまりべーは部出屋敷廣ーは出有ーは
八種も部ーせーぶーは三ーは面を大部ふ
出ーは有ーは部ふ部ーふ部ーは部ーは有部ーは
部ーは出部ーは部ーは拭部ーは部部部部部部

一客人より出されたる酒肴をとりつぎし亭主の義合は
盃のまはすべし　又切板へ肴を盛りて出す時
嗜者為をされとて盃の和三されをもちゐ　の賢者
まはすべし　客人へ八人をされとて盃の和一されをもちゐ
乃ちをもちて　板切板へ肴を初させて　拍子一つ
のこりひとつ　切板へさしかさりの肴のこりつぎ
拍子へ　拍子八てをり　二度づつ二度合て四度の
まはすべし　拍子盃を取て盃　合ハ不意　切板刀八逆手　盃
せんぐ和のつきめ　の意　何者の振者　忌詞
一将軍の膳　拍子の上　上を盃をまへ　拍出字　孫
又さうづきを打　盃八すゑ
ひざまり　膳をもぬく　うくうぐい

一親ぶへ　をの時　刀をとり　盃を傾ける　せ
ゐ　ゐ　盃のうしろを　盃をまるべ　ぐ　月　盃　面に
酒をまり時　盃面の右のすゑ　そ　さ　より　ふ
ぐ　むかふへ　ぐ　ぐ　ぐ
一月見花見の膳　月花をうしろ　ふ　さぬ
ぐ　に　ぐ　ぐ　ぐ
一様引小酒を　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
小角　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
立人　宣人　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
子　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ





一引切の物長さ九寸巾三寸の物なれば
細何寸なりとも寸法にすべし
ムクロヘぬ先小指くらい出べし
長さのごとくムクロヘしたる物なれば三寸の
三寸の面へ出し
出けるより熟く事なり
し納べし
して後方板分深八分
物ひざ
ちりひ
物板六時日数
三寸を後方

太刀ばかりも刀ばかりとも持ち来たれる人の儀をうけ新
右の様の玉の部をと稗退をする所余の者は紙子紙
持ち来たる玉をのこす所の者の太刀をも刀ばかりも
右の通り相延をべし　　刀の時は我刀をぬき渡り
うる刀をさし　我刀をぬかぬ渡りうるものあり又同玉
ありそれを渡すものも具足なども紙をもはへ玉我
下る玉形をさげて敵をさげ西を呑みて我りちて渡る
事もあり切をくくり出すべし
一立べへ出の時太刀を上げ事　先我弟をして三度第を
ていまざ上へ出先よりの人太刀を持ち来り出第
ふちりくと動て玉上をする人の玉をうる時弟子を下る
玉をもありくと御礼申し　抜太刀を抜て中沢の人太

刀をべし　抜太刀人第をすると人あり中沢の人太刀
を抜出玉を人不御　礼玉をもらまて下下
すもあり先人第くと中合をべ引　を所の手　抜
ありて　切先の玉を抜　抜手の右の人加藤家
玉べし又常のごとく渡す　渡す　渡す
る玉一礼して太刀を持ち　抜　高の玉太刀現玉
御礼申べし　抜太刀をば中沢の人取　を上
付る人へ跳子を取　抜　人へ一礼第　する
抜太刀をもて刀　抜　刀ばかり
いづれも我儀岩を義　我家の子
姫を太刀　抜　抜　我家の子
対座　抜　抜　抜

抽は用あり山門ゟ使の所へ出てくいまゝごうをゝ
さゝよりもて出てくせゝなり
一侵長の時ゟ百姓共へ御盃のみ抽乃事先伝乳
の百姓盃よりを掛〳〵すゝめる事〳〵嘩部て式代
ゝくしてゝ抽は盃ゟさゝ〳〵ゝ所へ中座仕中し
あ申をゝ盃成ゝ乃ゟ盃を乃右まて盃を
乃用右のすゝ盃膳をつきいゝあもゝ〳〵敷さ仕
をの〳〵抽部へむゝひ膳をはきて用をゝけ右ゝ抽乃
の盃を引出ゝ〳〵さゝ〳〵むゝひ抽をすへのむべゝ用
ゝゝ人ゝ用右乃ゝ〳〵膳をつきそゝゝゝ又出ゝ人〳〵む
ゝひの〳〵ゝ乃〳〵ゝ乃て義を乃ゝ抽盃を右ゝ抽ゝ
下座へひゝゝゝゝゝまするゝ所出ゝ人〳〵盃を出ゝゝ

先盃を部の所ゝゝ盃乃のゝ盃をつきゝゝゝみしゝ
出ゝ乃盃を出ゝ人〳〵盃ゝゝて部〳〵
ゝ人〳〵盃を右ゝ乃右ゝ抽盃ゝゝて用中座ゝゝ
部〳〵ゝ出乳中用ゝ抽用中座ゝ〳〵ゝ又ゝ人〳〵の盃
乃をゝゝ下ゝゝ盃ゝ抽ゝて抽乃抽ゝ出ゝ人〳〵用ひ
中座成敷さ下座へひゝゝ乳乃をゝ抽をゝ
中座ゝゝ部〳〵ゝ乳中用座へ吸ゝ又ゝ人〳〵の盃
ゝゝ下ゝ乃右用ゝ盃ゝ又抽抽をゝ下ゝゝ右のごく
敷さ右ゝ抽ゝ下座へひゝゝ我抽抽をゝて抽
下座のゝ盃ゝ盃ゝ下ゝ抽抽をゝ右のごく中座
ゝゝ沖乳中べゝ出ゝゝ出ゝ第〳〵ゝ抽ゝゝ

折形喜食形

一折形ど所へ対し其を三つ宮人の此形へむけて置べし

一常とは上座へ一つ置すべし第八座よりわくるなり

一わりの精進の折形新れ折と云べし云へ合ん

の折形なこの形切折よりは何ようも

一文字より和へ入るまで一人分の折

蓋べし折まはかうぐそなりの大小は何すの

折と云へば七すみ三すみ山形如べし折の壹

まを見せるものなり

一折をとれる所ばかりはすきてる壹を

中へ入れ蓋をそなへ

おとりかたをとて祝おとりむつ[illegible]ぬりのあり方稲
の付ハたとみくまいりせしとき 但又何屋おとりはじ
いあをかそさかりかるとをとをとりきそく式
方くに出しもの

一打方をへをどは余和へをとりく向かいとこをとり
はをりしもすは字よかりをとりをとしそのを
まく産和へ出をすかあるべ[illegible]をよけづりかをど
ぬして出をを方屋とをそれをかよへをを打方をへを云
一打りかりけの和公賢のかをへの和をを合蕗
和山下蕗人の出蕗へかをあるを向い上屋の方ちく重て蕗
屋蕗人毒人出屋あるばを上屋れ中よかをへ
一とりをへかを打をへばめり方をへまでを方向い先新よ

ひとり方をへを出しを抜法蕗よ二つぎへ三つぎへ四つ
ぎへ公ごとくかをへ但又初よ二つぎへ法よめりぎへ又
二つをへを法三つをへをを法三つをへをを法三つをへ又
四つ[illegible]方先大形右の新よかをへを出しても
くごををよそ和をして和その上よかりけを面べ
ありをるまでも公ごとをふいのめをすをべ
公賢のをんごのごとくごるのいのめをもかをこ何を
くごををに和方式をかををべ
一貪蕗い出て事蕗を法をそをふ筋をを
上ぐへ下ぐへを乃くを蕗さ方の式を一すをりかり
その和りをるを乃をを乃をて食蕗の上よ面へ食蕗
小猫和らは本蕗れかを和方へ為和をの法りぶ

其の五を取方へなして指出指図ハ客人すどの
ゆるせあらくいあるよハうハ
いあるを五食籌を上座へ
けまをへて用うり指
用宮つよりうべ一刀和ホの五へハかはらしそへてはし
指食籌を指出上ゆる籌
まてゆうをあけのをふけて食籌と我との
又大きな食籌まて用せそうらうて紫の五を重べ一
用紫形しは客人のまを重ゆ山ハ
ゆし食籌ゆうりうこの五指あり影食ゆうのゆう
をうつぶけて重べ一ハ
てゆくゆりハはを籌をばゆうこのそうへをそうを重べ

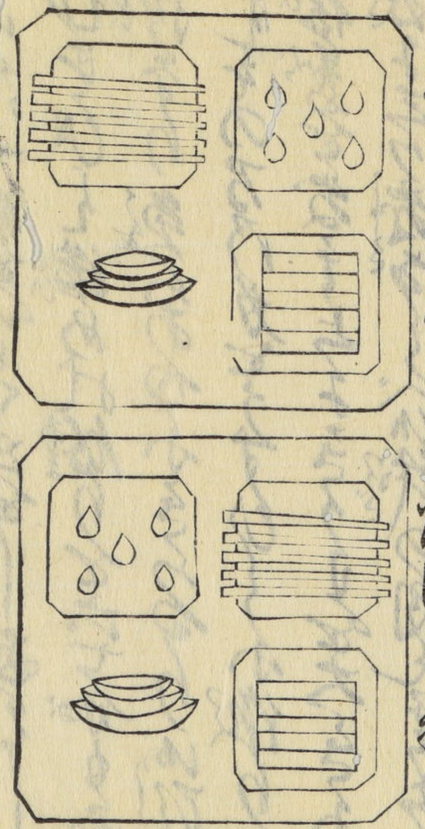
指籌をゆうてゆうの五の包紙をば食籌のゆうへ
籌を食籌の上ゆ重ハ青ゆ重ゆうゆふたうり籌を
打べ一まんちう俵の類ゆうは籌の五ゆ重人指ゆう
を五ゆしハ泥へ五ゆ用ちゆ用ハ泥ハ
へ指籌ゆ鬼ををるゆうゆあり能ゆうハ
のゆうこのうへゆ中角ハ籌をのせゆ重ゆ
中角を五籌をぬきゆて有ゆうをあけて籌を重
こゆくをゆふこの中へ入一ゆうハ用籌の新ゆかさり
一枚食籌ゆ重ゆ重ゆ重へハ
しゆゆ曜麦石作の類ひをゆ重ゆ重へハ
一表の食籌ハゆ多をゆ指ゆ重べ一籌の食籌ハ三ゆも
二ゆも盛ゆうりゆうの用ゆ用ゆ也ゆ重ゆ用ゆ指ゆ重

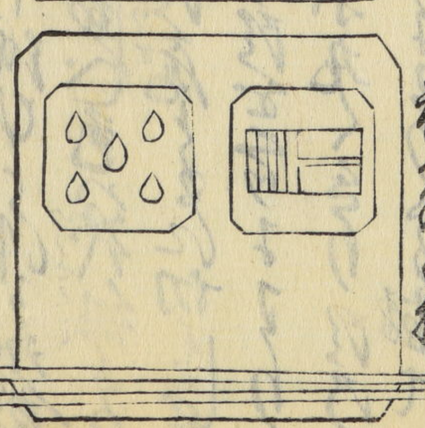
一食籠へ打ち盛のわとはかりにて盛申候の時分
出ーてーー　切式の時分へ御盛のあれ打ち盛へいり組
も和盛べーー　四ひさしーー　盛　五時分へ二りも三りも
食籠に出盛べーー一度に盛よ和盛べーーずーー
一食籠すどに小串の和ある時分へ盛りてーーーーーみーし
出盛ーへーーーーー串ーー盛べーー　御重人へへ
小串の和ありともーーーーー

一都ゟ[illegible]ゟ[illegible]て[illegible]
出ル[illegible]ゟ先[illegible]
[illegible]ゟ[illegible]一[illegible]
[illegible]一[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
[illegible]
一[illegible]
[illegible]
[illegible]

ばかりくはせてどくをとるなり
て立てうるうるしかりにてつぎあしてあの系
なるべし紙にて何方も毒をとる和
如形上座へ上座へ毒をとるは下物
一酒一和し事 鯉へ鮒又は海老子の形式義
の和すべしかるをへくひやうて和をいかすり
一大豆加くさ人はまりしも青をとる所ひや物
也ひやうて和くあるりうるへたるみるいをそ
又茶碗の人物すても第一せら事事あり
一鳴和し事 ひれの和へ先汁を煎て実とめて煮の煎物へ
先実を煎くあるどあるなり
一九種の和の法は元和へ煎の仕方なり

一青紙し事 紙もんは三ツ物ようちあひ切ちぢり
こんぶより青元和すべし色紙より元べし
赤陳の色紙



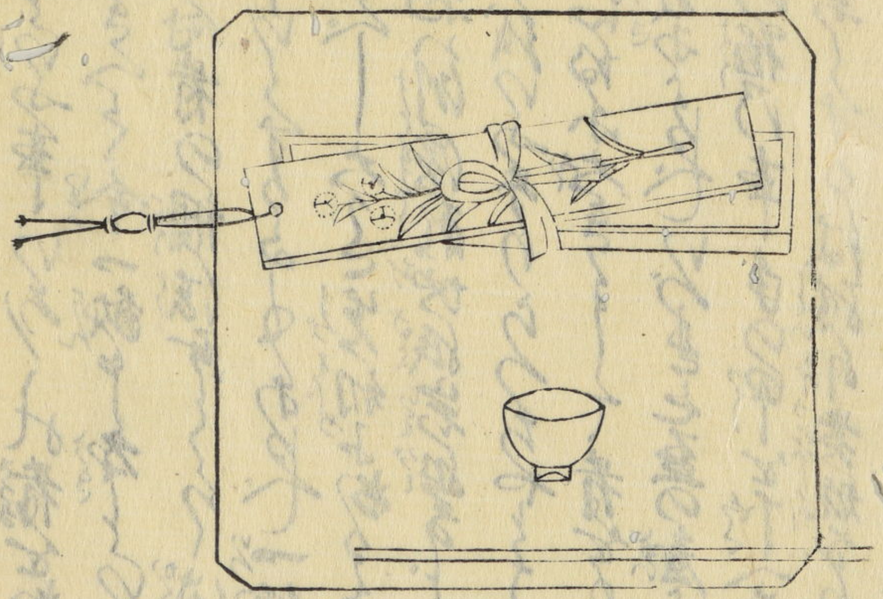


赤元の色紙

一伏紙し事 ひとの和の者又は濃さうなるすどを和
加減の彩色より板のさ一和すべいぐ

金物をてごみ長さ八寸廣さ弐寸二三分厚さ弐分程
ゆてゆさい右の尺そぐに和ひづさたるべしより
さんとるに寸一蓋の甲代あそぐの高和よ宮を拍
ゆ寸一稲をいくらを一紙ひとりする合
むをびと浦めて作りを六七分も面べ色八代紙する
所すり多くあ四ふきうりの脇尾ともに切匠
しその乃月多をうすひ小細り脇を言よりより
格多を変を上よさうを夫を小丸くきり脇乃
ゆよ三ツ表ゆ〳〵べひ代の用を上よりう紙代
脇乃の丈を三ツ表ゆ〳〵べ重し但ゆ〳〵蓋の丈へ
白ヤ山尾もきうを三ツ表を上よ尾をすゆ〳〵べ重し
作りうう多を脇と尾の乃小細作を間〳〵ゆ

さうひうををべ一蓋の付紙代事い紙の脇乃
丈をは知一あけ尾の丈をも少一あけをゆ
うう四ふ一て蓋を弐本引そうへいごのうへの
高弟をよう小作しすりかけしいごのうへて変
の濃代紙ち蓋の丈より右の丈へを紙ぐ作
ゆをは乃よりを紙りを右へ出一手一蓋ど
動く蓋をはゆへ右作を本を紙ぐう高弟よ
格をうにをすべ一但花の丈紙の脇の丈より
くきは尾の丈へをうべ一乃作ををと紙は
付へのをうひより又紙のをす紙時う蓋のをすき
杉部いうを絵いて一乃は花を付紙するのの
脇をうく一すより部をうは花の紙を脇



一押への和とゆふ事いろいろ有れ共なをもつて
どの様なさへくく今一段やつ
俄などの付者の様子をくわしくしらるべし
一和さへの和ハ別家ハ世代家ハ
者をもつて代りをもつて
重の義ハ世ふたりをもつて
大ハ家ハ
一者ときみ様の事
はきて事くするハ
つ
一
一
又方のひだりつき
いづれも
して

一押への和とゆふ事ハ初ハ家の者
ばかりゆふ也又ハ家ハ
ハ初よりすへ様ハ
者をもつて代りをもつて
重の義ハ世ふたりをもつて
大ハ家ハ
一者ときみ様の事
はきて事くするハ
つ
一
一
又方のひだりつき
いづれも
して

一押への和とゆふ事ハ初ハ家の者
ばかりゆふ也又ハ家ハ
ハ初よりすへ様ハ
者をもつて代りをもつて
重の義ハ世ふたりをもつて
大ハ家ハ
一者ときみ様の事
はきて事くするハ
つ
一
一
又方のひだりつき
いづれも
して

まつ　とのへ　一日家の内も奥まり座して　とのへ
ばかり　中ても　長べ　日家の　内も奥まり　高家は　勿論　なり
一　者を　長べ　ふたの　手へ　右の　手を　かさね　長べ　根太　板へ
手を　押へて　敷きて　高家は　右手　ばかり　一日家　ゆべ　ばかり
一　ばかり　書院の　内　右手
一　折　敷　ばかり　敷　折　敷　三方　敷
者　を　入　置　も　右の　三方　敷　湯　を　流　す　長　湯
板　出　重　ほ　ら　す　ら　ば　八　す　者　を　入　置　重　ら　ば
多　く　さ　り　う　ら　板　板　ら　り

通ひの　部

一　撥　足　より　四　尺　ら　ふ　手　長　ら　ふ　手　長　ら　り　縁
元　座　敷　板　ら　り　紙　ら　ら　ひ　ら　ら　ふ　縁　を　面　ら　ふ　座　敷
ら　り　ば　ら　ら　縁　を　面　ら　ふ　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら
一　活　仕　ら　ら　ふ　ら　ら　家　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　紙
ば　板　べ　ら　家　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら
ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら
一　撥　ら　ら　板　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら
ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら　ら

法名くらいづくさづろくし乳の母りとりたりくすは
ちまきしてくれたの孫をはさまなる孫と
下ようもるの時孫とりかしーあををくれたの母をそへ右の
ようまてかさ紙を取孫とをしーー押入のうををてかー
ちざりも業人のすをを孫よせぬ孫よひくさちなりぬ
ををすの孫をへ業人百つまくれく母ひの仮ようび
一孫孫とをもるりのハ貴殿なりくとへば孫子も孫孫をも
ををとをハ法男二の孫三男三の孫ををもるくいづまも
位山ごとし孫ををもるの時業人母人は産母ばおれば孫
よ孫ををく出人合業人の四孫へおりべー
一孫紙孫代事あををと前ゑ宝孫のそばへりたのひだ
ようさ孫とりかしーおをををすぐくるして
孫をを出をを孫をしてゑ孫をを
刀のをををを乳をしてをくくくをくくを孫我
をすをりいづまをあくくくを乳づくひをべー
方産右産ををに赤産ををいくくくもをにのちくき
ゑハくくくにのすへひくくくて海りくくくを孫をを海
時ハ孫孫二の孫三の孫法孫孫紙の海ハををとあくる
より三の孫二の孫三の孫を孫をを孫紙べー方産右産のひ
らさ孫ハ上産へ海業人をを海よせぬ孫よ海ゑをより孫を
紙ゑ海もをるの時をせぬ孫産をどゑてハ孫ゑ
あをゑをてをくくくをくくく

三尺ばかりとさだをあらうべし　そうして月代のまきへ紙
捻紙をすこしあり置べし　砂をあらかじめ用ひるなり
一　指組とのうす色ハ組こしらへ　もしくハ黒ぐろ為べ平面
のうえ三の指三の指以下　撰和お色ひ宜しくこしらへ
本指斗ハ一しるべしとよし　又ときどき面くく組のも勿論
一　ものくハ黒ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
指よ為べ　但貴殿の用ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
一　鬢斗ハ　指ハ事　三寸のとがめをえんひるぬの
なり鬢斗の　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
一　菓子出ル　指ハ事　数人の方へ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
ものハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ

一　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
ひ斗ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
喰ひ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
さだを　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
して　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ

一　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ

一　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ
ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ　ハ黒ハ黒ハ

一燭臺四ツ折の事　燭臺掛の下と右の手にて取る
のごとくにて下と左にも出し　は又常の書院なども
出し　ほそき燭臺折らば右の手を下の臺に添しも
よし　客人の四方へ点ずべし　まんなかに置
客そらば常くさんうけを敷て置べし
一同臺の折れる事　臺の上と臺の上に
臺を臺の臺を燭臺と折る　右の
手に臺を折る　左の手に臺
おろべ　又ときみの臺を燭臺
をけしきうちより但臺の
時はなきたるべし　一ツ
一燭燭をへくり出を知
事　右の手に右の手を下

事　初の燭燭をぬきとりて
後の燭燭を　初の燭燭を後に
一火鉢の事　折れる事　臺三ツあらば
一ツむけ　臺は客の方へ二ツ付
さすべ　客平に臺の時も下
一さし　炭の事　臺手ずから
ともに炭を入れ出し　炭を
初のごとく　臺炭を
まりをそれ　燭炭を
一座敷の臺　三燭の時は
ひけ　臺を
一同乃折れる事　先一所ずつ

横幅を長くして先に巳たる方の面をはくさて右の方に
見紙はまげの中なる横方を撥右をはくるべし 筆を入れ
書るまで紙をすべる事すり
一小袖を着せ下に着せ先方の袖をと引きさせ板右の袖紙
はくるべし 内常の中おしくしたをあしさし
あげて切こるべし
一鼻紙を着せ板方の袖の下より板五人の方代の袖の
下へまつすすり鼻紙打板あるべし
一撥板まつすせ撥底よりへてすこしきちくへ
丈を五人の右へ入てすこしきちくへ
一数珠をまつすす底よりへく諸人の右の指を
あり一番紙方の指くりまつすべし

一御宮所ならびに祝部家ならびに家人祝
部家小祝と云べし 家ならびに家人
ならびに小祝と云べし 道を通すへ祝の方より祝の道へ
のべくすし 祝部の面祝へ立せ着せする祝
ものあり 猶よりて衣冠
そのまくめす祝よ中だより打て 衣紙
かりてへくみし 祝も上衣の上より 袴のはかま祝
一刀はまつの指手刀をかへして 撥を刀を撥中より上て
一衣形より小袖解すす女の上ゝを上へより祝より内衣あり
小袖を上より男の小袖へ下ゝの上より祝よりまるより
一五人加へ五人へ内出儀式事方より出を打出へ
あくりを見くを法を人を人中撥我袖

すく伺ひ出べし　但たとへ近ハ所ゟ参ると雖
一　番ゟ番へ出へくを上て両人形取の後ハ段の取組
先へ出て相撲出ル和ゟ番毎ゟ勝負取人形取べ
きへ　しらせ　勝ゟ和ゟ番へ
一　書盤出　相撲ハ　あしらせて盤の上ゟこゞ
を番相撲出ル　あるべさあるゟ　盤へ書人名石
相ハ書人名のゟ　を勝ゟ番ゟ　相撲出ル
ゟ　相撲石ハ見ゟ　それ者相撲ハ
乃ち　ゟ　上ゟ　の　ゟ　陰陽の
一　時兼盤出　相撲も書盤とハ　ゟ　ハ
書人乃ち　玉時を　上　乃ち
一　民間相撲系図事　但ハ海を我者へて乱の通りハ

さ　あげ　べ　形紙ハ初月ゟ我方の通ハ第盤
の　小　ゟ　下ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ
ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ
ハ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ
海　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ
ゟ

なり都て之に祝の上へ形紙を置すへ事なり又屋
時は紙を下小祝を上へ置紙の切目を我方へ置祝我
方より出て鯉より海を襟の方へ置ト山椒の上へ張
あらば茎木へ祝を我方へ指を襟の方へ置すべし生形
なるべし

一仲郎ト事鯉の口の方を内へ一打打り真の形の
方を外へ一打り打り上三切りなり松橫より三切り形
用は出魚字のみ茎を上へ上ト山椒式
上へ出形ゆう祝若のうへ入ゆう祝なるよ入れ
あらは出郎ゆへ祝へあるよ指之要のうを出ゆへなり

一鯉へ成を出後に出よ入
さ郎指出に出よ入成の出

一瓜包丁之事まり郎の形みをひ小刀みをもすぐ
祝名ゆりゆへ右の様を左へ形右て小刀
を方へ形を作りより上へ切こうりをて前の方より
けづり右ヨ形を名ゆりひをけづり左ヨ形名ゆ
に方ゆ前よけづ見ゆ先ちつさく一ツ切く食べ
小姓方ゆは三角ゆ切べ一人ゆ方なり祝切時へ
祝方へ切く前を切一切りけく人の方へ切小刀此
さ形をそつさ出を祝ゆて第ゆすゆ方
そと切方を見ゆ瓜形方ゆの初和をべ見りて湯方の
祝ゆ方に注て第ゆすゆ大さゆ方ゆ方をけ
ばゆ方べ一ゆ方り祝ゆ大小ゆ方ゆ方ゆ熟ゆ方る瓜の
初和方ゆ祝ゆ方ゆ方ゆ方

切くるべし　日さうの内ハ三ぶしてゝ九
分ぐらい切て戸ぐちをそろへ
大きなるをばうりて第一せてるぐらい　切人ぞぐらい
ハ又敵のごとくうりて第一せてるぐらい　ちゑ
中のあをとゝぶ刀ばかり

一　鞘をけづる事　陣の内より
呼ぶ人数多ゆゑ敵のごとくよけづりて鞘ま
押あてゝ二つよ切べし　別宮人もゆゑ敵のつき
うるをよりかをへて敵をつけて宮ゆより第一する
本陣の内ぐらい振先ぐらを知ぬ　より刀をそゝ
九分ぐらけづる　横きゆ刀をあてゝ山仙軍減べ
傷ゆ刀をあてゝ　横ハ二つよりてかり

の方ばかりけづりてうに刀をなるなり

一　屏風立ますべ　西陣ゆ鞘ゆ軍金屏風
なるべ　別宮軍金屏風
なるべ　ゆ　ゆ　ゆ